

最近のESRI政策フォーラム報告より
第61回ESRI政策フォーラム
 シリーズ：「静かなる有事」
 少子化と男女共同参画
第1回「人生100年時代の若者の恋と結婚」

(令和4年10月4日開催)

元内閣府経済社会総合研究所総務部総務課

福井 瑠璃子

我が国の出生率は低下を続け、回復の兆しはまだまだ見えない一方、家族の姿はこの30年で大きく変容した。「もはや昭和ではない」。令和の時代の女性の人生、家族、社会の実態に即した少子化対策の在り方について、客観的なデータに基づいて討議し、幅広い議論を喚起するため、政策フォーラムのシリーズ企画「『静かなる有事』少子化と男女共同参画」を開催している。令和4年10月、第1回として「人生100年時代の若者の恋と結婚」をテーマに活発な議論が行われた。以下、その概要を紹介する。

冒頭挨拶

○森 まさこ 内閣総理大臣補佐官（女性活躍担当）

これまで我が国では少子化と女性活躍・男女共同参画をリンクさせた議論は少なかったが、ジェンダーギャップが小さい国ほど出生率が高いことから、少子化を解決するには、両者を結びつけて議論し、出生率上昇に向けた対応策を模索することが重要との指摘がなされた。

基調講演

○林 伴子 内閣府経済社会総合研究所次長

経済分野のジェンダーギャップ指数と出生率には相関があるが、これは因果関係というよりも、双方に影響を及ぼす「第3のファクター」の存在によるものと考えられ、これらを抽出・分析するべく、本シリーズを立ち上げた旨説明があった。また、離婚件数が婚姻の3分の1に増えるなど家族の姿や女性の人生の実態が昭和の時代から様変わりしたこと、若年未婚女性の3分の1が非婚就業を予想していること、出生率の高い国では同居している若い男女が多いことなど、データの説明が行われた。

パネリストからの説明

○山田 昌弘 中央大学文学部教授

若者世代の恋愛衰退について、プッシュ要因として、伝統的な家族への憧れが強い中で、特に男性収入の不安定化により結婚相手の選抜が進んだこと、またプル要因として、恋愛以外にも楽しむことが出来る環境が整っていることが挙げられた。欧米のような多様化を進め、男女共同参画を通じて経済的自立を確立し、恋愛相手を選択できる環境づくりが必要との指摘がなされた。

○山口 慎太郎 東京大学大学院経済学研究科教授

少子化と家事育児の男女間格差について、男性の家事負担率が低い国では出生率が低くなっており、家事分担の配分を夫婦間で均すことが女性側の精神的な安心材料にもなるため重要との指摘がなされた。また、それらに対する政策的手段として、①男性の育休取得の推進と②テレワークの推進が提示された。

○永田 夏来 兵庫教育大学大学院学校教育研究科准教授

若者の恋愛観について、交際経験がある人数に変動はないが交際しないことを選択する割合が増えており、その要因として、①世代間におけるギャップと②画一的な恋愛への窮屈さが挙げられた。若者から忌避されない制度設計を行い、制度を実態に当てはめるのではなく、実態に制度を馴染ませるための工夫が必要との指摘がなされた。

○櫻井 彩乃 #男女共同参画ってなんですか代表

アンケート調査結果から見てきた若い世代の結婚・仕事に対する意識について説明がなされた。少子化対策、男女共同参画社会の実現には、個人が伸び伸びと安心して暮らせる制度作りや、制度を含めた多様な価値観の尊重、役割分業意識や賃金格差の是正が重要との指摘がなされた。

パネルディスカッション

○第3のファクターとして考えられる点について

(山口教授) 性別役割分業意識が強いことが大きな壁。
 (櫻井代表) 時代に応じた価値観のアップデートが出来ていない。

○結婚と経済力との関係について

(山田教授) 親との同居が主流な社会では結婚が魅力的ではない。

○未婚男性がパートナーに働くことを求めている背景について

(永田准教授) 働く母親を見ていて違和感がない。

福井 瑠璃子（ふくいりりこ）